環境のオントロギー Ⅲ

竹　原　　　弘

はじめに

この稿は「環境のオントロギー」の三番目の論考であり，環境を時間的側面から考察する試みである。人間は空間的存在であると共に，時間的存在でもある。従って，人間の環境についての時間的な考察をすることによって，環境というものが，あるいは環境問題がより明確に明らかになるはずである。

まず，最初に時間について規定する。時間とは何かという問題は，アリストテレス以来の古い問題であるが，様々な時間論があり，時間とはこういうものであるという時間についての規定も様々である。

本稿では，まず時間を差異の産出であると捉えて，主体としての人間の時間性について述べて，それから主体としての人間を取り巻く環境における差異の産出としての時間性について述べる。それから，人間存在の集合態としての世界，あるいは意味の集合態としての世界における差異の産出としての時間について述べる。

さらに，システム内における時間性について述べて，そうしたことを踏まえて，環境における時間性を考察する。環境問題は，先に述べた様に（「環境のオントロギー Ⅱ」『徳山大学論叢44号』1995年12月号）空間的な問題であると共に，時間的な問題でもある。地球の温暖化や，資源の枯渇，オゾン層の破壊の問題は，時間的な問題である。いわば，人間の様々な営みによる環境破壊と，環境保存との時間的な追い駆けっこであると言ってよい。

従って，本稿では，そうした問題意識の下に，環境の時間性を考察する。

Ⅲ　環境の時間性

（3－1）

古来から時間についての考察には様々な物が有るが，ここではそうした時間論についての歴史的な考察は排除して，我々が環境を時間に即して論ずるために有効な時間についての考えを打ち建てる試みを為す。常識的な時間についての考えでは，時間は過去，現在，未来から構成されているということになっている。しかし，時間という物がそのように三つに分節されるためには，時間的な存在として時間を生きる人間存在が存在している必要が有る。何故ならば，時間がそのように三つに分節されて，三つの部分から構成されるためには，時間をその様に三つの部分として生きる存在としての人間存在が必要だからである。人間だけが，過去についての思い出を持ち，未来について思いを巡らせることが出来る存在であり，今という瞬間にのみ閉じこめられていない。

そこでまずフランスの哲学者であり，主にフッサールの後期思想を継承したメルロ=ポンティの時間についての考えを基礎にして，そこから時間についての考察に入る。メルロ=ポンティは主著である『知覚の現象学』の一章を時間の問題に捧げている。メルロ=ポンティが時間について論ずる場合の基本的な枠組みは，人間存在が現実に世界に直面している現在が，時間が時間として成立する基盤であるということ，すなわち人間存在が世界へと関与している，この主体と世界とのある存在関係が成り立っている場としての現在から，時間が時間として現成するということであり，すなわち時間とは客観的な存在に内属するものでもなく，また主体の時間意識に有るものでもないのであり，主体としての人間存在と世界との存在関係としての志向性のうちに時間が時間として成立する基盤が有るのであるということである。

「私が時間と接触し，私が時間の流れを知るのは，広い意味での私の＜現前野（champ de presence)＞――つまりその背後には流れた一日の地平をも

ち，その前方には夕暮と夜の地平をもった，私が仕事を為しつつ過ごすこの時間である。」[1)]

すなわち，私に対して現前している現象的領野は，それ自身空間的地平をもつとともに，時間的地平をもつのである。すなわち，私が臨在している現象野は，それ自身厚みをもっているのであり，私の過去の関与の痕跡と，私がこれから為そうとすることの展望が，現象野には含まれている。したがって，私がすでに遠く隔たった過去へと開かれており，また到来する未来へと開かれており，それらをそのように位置付け，私の世界への関与の仕方の中において保持するのは，この現前野においてである。したがって，「すべてが私を現前野へと送り返すが，そこでは時間とその諸次元とが介在する距離もなく究極的な明証性のうちに親しく現れる根源的経験である。未来が現在へ，そしてさらに過去へと移行するのが見られるのも，ここにおいてである。」[2)]

つまり，私が世界へと関わっていることによって開かれる現前野へと関与するこの現在において，未来は現在へと到来し，過去へと移行するのである。つまり，現前野は時間が時間として現成する根源的領野であり，私が面しているそこにおいて，時間が分節され，位置付けられ，あるいは時間の移行が為されるのである。

私の現前野において，時間が分節し，時間が現成してくるのは，私が現前野において私を取り囲む状況を存在論的に組み替えるために，何らかの乗り越えを為すがゆえであり，そこに「現在の未来に向かっての炸裂あるいは裂開 l'explosion ou la déhiscence du présent vers un avenir」[3)] が生ずるがゆえである。そうした私による私の状況の乗り越えとしての企投において，未来は私の現前野に到来し，その結果現在は過去へと押しやられるのである。そして，私はそうした私による私の状況の乗り越えの絶えざる試みにおいて，過去へと押しやられた私の現在を私は私の存在において保持している。そう

注1）M. Merleau-ponty : *Phénomenologie de la perceptoin*, Gallimard, 1945, p. 475.
2）*Ibid.*, p. 475f.
3）*Ibid.*, p. 487.

した志向性によって私は世界の内に自らの存在を確保し，私の世界を私の状況たらしめているのである。

「私を周囲世界の中に繋留するそうした志向性を，フッサールは未来予持（protension）と過去把持（retension）とよんでいる。これらの志向性は，中心的な＜私＞からではなくて，いわば私の知覚野そのものから発するのであり，この知覚がその過去把持の地平を背後に引きずり，その未来予持によって未来へと食い込んでいるのである。」[4)]

そうした未来予持，過去把持は，私の現前野，知覚野から発するのであり，自我としての私から発するのではないのである。つまり現前野は，志向性の交錯態であり，そこにおいて，現前野を構成する私の状況の乗り越えの契機が潜んでおり，私が未来を描き出し，過去を保持するのは，私が面している現前野においてである。すなわち現前野において，私は私の状況を構成しているのであり，そこから私は私の未来を描き出すのである。つまり，その現前野に潜んでいる，私の未来への乗り越えによって組み替えられる新たに到来するであろう私の新しい状況を予測するのであり，またその乗り越えによって，現在から過去へと押しやられた過去を保持しているのにほかならない。すなわち，私と世界との交錯態としての現前野において，過去把持と未来予持は発するのである。

そして，私による私の状況の乗り越えの試みによって，新たな瞬間，つまり私の世界との新たな交錯態が出現することによって，過去へと押しやられた瞬間はある変容を蒙る。つまり，現前野から逃亡することによって，過去へと移行した瞬間は，それが現前野から移行する限りにおいて，変容する。それは時間の層というフィルターを通して見られるのである。すなわち，私による私の状況の乗り越えの試みによって，私の存在によって追い越されたかっての現在は，それが私による乗り越えによって，私の現前野でない限りにおいて，言い換えるならば，私の「いま」を構成しない限りにおいて変容するのである。

4）*Ibid.*, p. 476.

「新たな瞬間がやって来るたびに，先立つ瞬間はある変容を蒙る。私はその瞬間をなお手中に保持しており，その瞬間はなおそこにあるのだが，しかしそれは既に沈降し，現在の線から下降している。それを保持するためには，時間の薄い層を通して手を伸ばさなければならない。」[5)]

時間の薄い層とは，私による私の状況の乗り越えによって構成された時間の層であり，私の企投が作り上げた時間の層である。先ほどまで現在であった瞬間が今は，時間の層を通して，ある時間的隔たりを介してしか姿を現さない。さらに次の瞬間が来ると，それはさらに変容を蒙って，過去把持の過去把持になる。

「目立たない瞬間とか，分離しうる射影はなく，全てが一緒に動く時間性の連続的な移行がある。そこではそれぞれの未来予持は気が付かないうちに過去把持へと移行し，それぞれの過去把持は，過去把持の過去把持へと移行する。そこではそれぞれの未来予持は，現在を通過することによって過去把持へと移行しつつ，新しい未来予持を産み出す。」[6)]

現前野において，かって「いま」であった過去把持が，時間の層を介して射影するのであり，現前野を構成するそうした志向性の錯綜が時間を構成しているのである。

（3－2）

以上素描した様に，メルロ=ポンティの時間論は主体が面している現象学的領域，つまり現前野の主体による絶えざる乗り越えによって生ずるのであるが，こうした時間論を手引きとして，今度は我々の時間についての考えを述べる。

既に述べた様に，人間存在は意味の集合態としての世界の中に組み込まれていることによって，世界からその都度の存在の仕方を贈与されて，その都度存在している。主体としての人間存在は，或る意味へと己れの存在を適合

5）*Ebenda.*
6）*Ebenda.*

せしめることによって，己れの有り方を構築している訳であるが，そうした或る意味との共犯による，世界の中での己れの存在の仕方の構築が現在である，と言える。人間存在は或る現実に，つまり或る意味の組合せに直面している訳であり，そのことによってその意味の或る組合せから，己れの有り方を築き上げる意味を選択し，それへと己れの存在を適合せしめることによって，己れの或る有り方，存在様態を形成しているのであるが，そうした，意味を己れの存在へと取り込んで，世界の中で或る有り方を構築している，人間存在の存在の或る一面が現在であると言える。したがって，現在はいわば世界から与えられた自己の存在の仕方であるし，あるいは己れが組み込まれている意味の集合態としての世界によって与えられる己れの存在可能性，言い換えれば多様な意味から己れの有り方を構築する媒介としての意味を選ぶことによって，構築される有り方が現在である。

主体としての人間存在は，意味の集合態としての世界に組み込まれて有ることによって，一面では既に世界の内に意味の集合として沈殿している様々な存在可能性に直面している訳であり，いわば無数の実存の痕跡である多様な意味の世界の中への蓄積によって，そのように意味の集合態へと組み込まれて有ることによって，自己の大まかな有り方の軌跡は描かれているのであるが，そうしたことに基づいて，自己の存在可能性の軌跡から自己の有り方を選択することによって，つまり意味を選択することによって，その都度の己れの有り方を選ぶのである。そのようにして，選ばれた自己の有り方，あるいはそれの媒介である意味の選択による己れの存在の構築が，自己の現在を構成しているのである。

したがって現在とは，主体としての人間存在との或る存在関係である，と言える。つまり人間存在は，意味の集合態としての世界の中に組み込まれている限りにおいて，常に或る有意味的存在者の意味との或る存在関係を形成しているのであり，そうした主体としての人間存在と有意味的存在者との或る存在関係が現在を形成しているのである。例えば，私が電話ボックスに入って，何処かの誰かに電話をしているとすると，その場合に，私は電話とい

う有意味的存在者の意味へと己れの存在を適合せしめることによって，電話をかけるという有り方を構築している訳であるが，その場合に私は，私と電話という有意味的存在者との間に或る存在関係を形成しているのであり，私という主体は電話器という有意味的存在者の意味へと己れの存在を適合せしめることによって，電話をかけるという有り方を形成しているのである。そして，その電話をかけるという私の有り方が私の現在であり，電話機という存在者へと関わっている私の存在の伸び拡がりが，私の現在である。あるいは私が電話ボックスの中で，電話をかけるという有り方をしている，私の存在から展開されるパースペクティヴが私の現在である。つまり，私が電話機と共に構築している私の存在は，世界を或る展望の下に開いている訳であり，世界を或る角度から見ている訳であり，その様に，私の存在に基づいて開ける或る展望が私の現在の一契機として，私の現在を構成しているのである。その展望は，私という人間存在と電話機との存在関係によって，私に対して開かれた世界であるが故に，私という主体は，その様な形で世界についての或る像をそこで得ているのである。言い換えるならば，私は自らの有り方を電話機という有意味的存在者の意味へと適合することによって構築している存在の仕方から，そのことに基づいて展開している世界の光景を保持している訳であり，電話ボックスから見える世界の或る側面を，私がそこで築き上げている有り方と共に現在において保持しているのである。

パースペクティヴは自己の存在が形成する世界の開示である。世界は意味を媒介にして構築される自己の存在によってその姿を開示する。電話ボックスで，私が電話をかけるという有り方を，電話機という有意味的存在者と共に構築することによって，そのことから見られる外の光景は，電話をかけるという私の有り方が開示する世界の姿であり，世界のそれ自身の姿ではない。私という存在者，主体が世界を見ることが出来るのは，私が何かの有意味的存在者の意味へと私の存在を適合させることによって築き上げる私の存在からであり，神の様に，世界の外から世界を鳥瞰することによってではない。世界も，その姿を開示するのは，それを全的に，いかなるパースペクティヴ

を媒介にせずに，ではなくて，或るパースペクティヴを通して，その一面を現すことによってである。

そして，そのようにして開示される世界は，私という人間存在の現在を共に構成しているのであり，私の現在の一契機にほかならない。何故ならば，開示された世界は，私が或る有意味的存在者の意味へと自らの存在を適合することによって築き上げる，私の存在に対してその姿を顕わにするのであり，私の意味を介して築き上げた存在無しにはありえないのである。つまり，私が電話ボックスの中で，であろうと研究室の中であろうと，世界の内の或る空間において，何らかの意味を媒介にして，存在しているその有り方からでしか，世界を見ることは出来ないのである。私が居るここから，私が構築している私の今の有り方からのみ，私は世界の一端を垣間見ることが出来るのである。したがって，世界の開示は，私の存在に属しているのであり，言い換えるならば，私の現在である，意味を媒介にして構築された私の存在に世界の展望は属しているのである。つまり，私が何らかの意味と共に構成する私の存在には，その存在が形成するパースペクティヴを介して開示される世界が属しているのである。つまり，私の現在は，私の存在から展開される世界を巻き込み，それを私の現在の一契機としているのである。

（3－3）

私の現在はそれではどれだけの伸び拡がりを持っているのだろうか。フッサールは，現在は過去把持と未来予持と現印象から構成されている，と述べている。[7] すなわち，我々の意識は一瞬前の過去と一瞬先の未来とを保持しており，それと「いま」についての知覚が現在である，としている。そうした，未来予持-「いま」についての知覚-過去把持という連なりが現在である。

確かに，現在という時間が，伸び拡がりを持っていると考えるならば，つまり瞬間を現在であると考えないならば，知覚としての今の瞬間のみを現在

7）E. Husserl: *Zur Pänomenologie des innern Zeitbewusstsein, Husserliana Band X*, 1969. Martinus Nijhoff, Haag.

であるとすることは出来ないであろう。しかし，フッサールの言う，そうした未来予持-「いま」-過去把持の連なりは，世界への主体としての私，あるいは意味の集合態としての世界へと組み込まれることによって，世界の内に自らの存在を確保している主体としての私が，世界の中で，或る有意味的存在者の意味を自らの存在の中に取り込みつつ，己れの存在を構築しつつ，意識の中にそうした一連の連なりを構成しているのでなければならない。そうであるならば，一連の連なりを意識の内に構成することは，或る意味への己れの存在の適合という基盤の上において為されるのでなければならない。

私という主体が電話ボックスの中で，受話器を持っているという有り方に基づいて，すなわち受話器という有意味的存在者の意味へと己れの存在を適合せしめて，己れの有り方を構築していることに基づいて，私の意識は一連の時間的な連なりを形成しているのである。その場合に，先に述べた様に，私のそうした存在には，その存在に対して展開される世界の一光景が属しているのであり，さらに私が受話器の向こう側に居るであろう相手に対して話す言葉の連なりや，受話器の向こうにいるであろう相手が，受話器を介して私に向かって話す言葉の連なりが，私の存在に属しているのである。そうした，私が受話器という有意味的存在者の意味と共に構築している私の存在には，幾つかの契機が属しており，そうした私の存在に属して，私の存在を構成する一連の契機が，私の意識の中で時間的な継続性，つまりフッサールの言う未来予持-「いま」-過去把持という継続性を形成しているのにほかならない。したがって，そうした一連の時間的継続性を現在と呼ぶのは，私の受話器という有意味的存在者の意味へと己れの存在を適合せしめている私の存在に基づいて，でなければならない。つまり，現在の限界点は，私の存在の継続性の限界に求めなければならない。私が受話器との共犯によって世界の中に構築する私の存在の連続性が，それに属する様々な契機の一連の連なりの連続性，つまり未来予持-「いま」-過去把持という一連の連なりが現在を構成していることを保証するのである。したがって，私が，私の存在を形成している媒介としての受話器から，己れの存在を離脱せしめるならば，私は

それまでの私の存在を突き崩すのであり，私が受話器という有意味的存在者の意味と共に構築していた私の存在を放棄するのである。そして，そのことによって，私の現在は終わりを告げて，私のその有り方は過去へと移行するのである。

（3－4）

メルロ=ポンティは『知覚の現象学』の中で次の様に述べている。

「私が私の現在を，生きているままに，それが含んでいるすべてのものを伴った姿で把握するならば，私の現在の『中に』未来と過去への脱自があり，この脱自は，時間の諸次元を，互いに競いあうものとしてではなく，互いに分離されえない物として現出させるはずである。したがって，現在にあるということは，過去から未来にわたって永遠に有ることである。主体性は時間を引き受け，あるいは生き，そして一個の生の総合と一体となるのだからこそ，それ自身は時間のなかには存在しないことになる。」[8)]

時間性とは主体の脱自である，とメルロ=ポンティは言う。

我々は現在という時間の一契機について述べたのであるが，それだけでは時間性が明らかにはならない。主体としての人間存在は同一の現在にのみ留まっているのではなく，現在であった物は過去へと移行してゆき，未来であった物は現在へと移行し，我々がそれを生きるところの時間となる。そうした，時間の移行はどうして生ずるのであろうか。

我々は現在とは，主体としての人間存在が或る有意味的存在者の意味へと自らの存在を適合せしめることによって，自らの存在を構築する所である，と規定した。そうした現在は必然的に過去へと移行して，私の現在ではなくなる。そうしたことがどうして生ずるのであろうか。人間存在は或る有意味的存在者の意味へと自らの存在を適合せしめることによって，自らの存在を築き上げるのであるが，それがその人間存在の現在である。人間存在は或る意味へと自らの存在を適合せしめることによって，自己の存在とその意味と

8）M. Merleau-ponty : *op. cit.*, p. 483.

の間に存在的関係を形成しているのであり，そのことによって人間存在の現在を形成しているのである。そして，そのことを基盤にして，フッサールの言う，未来予持-「いま」-過去把持という時間意識が成立するのである，ということは既に述べた。

そして，人間存在は己れが己れの現在を形成している媒介としての意味との存在的関係を突き崩して，その意味から己れの存在を離脱せしめることによって，その意味と共に構築していた現在を過去へと移行せしめるのである。或る意味と共に形成していた現在は，人間存在が自らの存在をその意味から離脱させることによって，現在ではなくなる。そのことは，人間存在と或る有意味的存在者との間に作り上げられた存在的関係の放棄であり，あるいは自己の存在の変更であり，その有意味的存在者と共に構築していた現在の突き崩しである。そうしたことを我々は，人間存在の存在の中に差異を産み出すことである，と言う。つまり，人間存在が或る有意味的存在者の意味から己れの存在を離脱せしめることによって，その意味と共に築いた現在を放棄すること，あるいはその現在を過去へと移行せしめることは，自己の存在の中に差異を生じせしめることであり，あるいは自己とその有意味的存在者との間の存在的関係に差異を産み出すことである。さらに，その現在によって開示される世界の或る展望に差異を生じせしめることである。

つまり，時間とはこのように，様々な存在的関係に差異を産み出すことである，と我々は規定する。差異は人間存在が存在する限りにおいて，差異として有る。何故ならば，人間存在のみが差異を差異として把握することが出来るからである。人間存在が或る有意味的存在者の意味から，己れの存在を離脱せしめて，別の有意味的存在者の意味へと己れの存在を適合せしめて，新しい現在を構築する場合に，そこに産み出される差異を差異として把握することが出来るのは，意味の主体としての人間存在である。

（3－5）

人間存在が或る有意味的存在者の意味から離脱して，別の有意味的存在者

の意味へと適合することによって，新しい現在を形成する場合に，それまでの現在は過去へと移行する。そして，そのことによって人間存在の存在の中に差異が産み出される。つまり，現在と過去の間には存在の差異という垣根が出来ることによって，それまでの現在は過去へと移行するのである。したがって，現在と過去との間には，存在の差異が存しており，それが現在と過去とを隔てている。それでは，新しく構築された現在によって過去へと押しやられた，かっての現在は何処へ行ったのであろうか。

フッサールやベルグソンなどは，過去は意識の中に保持されていることによって，記憶として存在している，と述べているのであるが，そうであろうか。確かに，過去は記憶として，意識の中に保存されていることによって，それを想起する際に，現在の意識の中に立ち現れるのであるが，先に述べた様に，そうした時間意識も，人間の存在によって支えられているのであるから，それだけの説明では不十分であろう。ベルグソンは，記憶は，脳の機能によって，身体が直面している現実との関わりにおいて，想起されると述べているが，[9] そうであるならば，記憶は身体とそれが直面している現実との存在関係に基づいて想起されると言うことが出来るのではないだろうか。

我々は過去は，人間存在が有意味的存在者の意味と共に構築する現在との間の差異によって，過去として人間存在によって位置付けられながら，さらに人間存在が新しい有意味的存在者の意味への己れの存在の適合によって，作り上げる新しい現在を支えている，と考える。つまり，過去は記憶として意識の中に蓄積されていると共に，人間存在の現在の存在を支えることによって，現在の中に有るのである。

例えば，私はさっき，つまり既に過去となった時に，電話ボックスで或る人に電話をかけて，その人と或る場所で会う約束をしたとする。そして，何時間か後で，その人と約束した場所で会ったとする。その場合に，私がその人と或る場所で会うという新しい現在は，その時には既に新しい現在によって追い越されることによって過去と為った，かっての現在，すなわち私が電

9）H. Bergson : *Matiere et memoire.*

話ボックスからその人に電話をしたという過去によって支えられているのである。あるいは，私がその場合に，私の存在を適合せしめている椅子や机，その他の諸々の有意味的存在者が，私の新しい現在に帰属している訳だが，それらが私の現在に帰属して，私の新しい現在を共に構成しているのも，私が何時間か前に電話をしたという私のかっての現在によって支えられているのである。あるいは，私がその人に電話した時と，その人と会っている現在の間に介在する諸々の現在，例えば，私がその人に会うために乗った車や電車へと私の存在を適合した，かっての現在も，私がその人と会っている現在を支えているのである。

あるいは，私が何年か前に或る大学に在籍していて，その後，その大学を卒業したということも，私の現在と全く無関係なのではなくて，やはり何らかの形で私の現在の中に沈殿していることによって，私の現在を支えているのである。

つまり，私の過去は私の記憶の中にのみ留まっていて，私が時々それを想起する際にのみ私に現前しているのではないのであり，記憶を始めとする私の時間意識は，既に述べた様に，私の存在に基づいているのである。私が存在して，或る有意味的存在者の意味へと私の存在を適合せしめている現在に基づいて，私の時間意識は成立するのであるから，そうした記憶も私の現在に基づくのである。記憶が想起されるのは，現在においてであり，過去の私の記憶は私の現在へと立ち現れるのであり，そのことは私の記憶が私の現在に基づいているということの証左であろう。さらに，私の現在へと到来する私の過去は，私の現在に属している。それは，私の存在に基づいて開示される世界が，私の現在に帰属しているということと同じである。

アリストテレスやアウグスィヌスが，時間は存在するか否か，ということを問題にする場合に，過去や未来はもはや-今-では-ないと，まだ-今-では-ないが故に存在しない，と述べて，今のみが存在する，と主張するのであるが，過去はもう過ぎ去ったが故に，未来はまだ到来していないが故に，存在しない，という主張は，現在という物の性格を掴んでいないところから

来る誤解ではないだろうか。客観的な過去とか，客観的未来などという物は存在しないのであり，過去を過去として把握し，未来を未来として把握する時間的主体が存在して，初めて過去や未来も存在するのであり，また現在も，そうした過去や未来との関係においてのみ現在として理解しうる。過去や未来という物の意味を理解し得ない存在者にとっては，現在も，現在として把握することが出来ないが故に，現在も存在しないのである。現在が現在として存在するならば，それの存在根拠としての過去は，それを過去として把握し，それによって現在が存在すると把握しうるならば，現在の根拠としての過去は，現在において存在するのである。

（3－6）

未来はどのような時間であるのか，というと，現在の中にその萌芽が有る時間である，と言える。私は現在，或る有意味的存在者の意味に自らの存在を適合せしめていることによって，私の現在を，つまり私の存在を構築しているのであり，そうした私の現在に基づいて私の未来は私に到来するのである。確かに，未来は現在からするならば，未定であり，未来を現在へと到来せしめるのは，私の自由に委ねられているのであるが，しかし，私の未来が全くの未定であり，私は私の未来に対して絶対的な自由を行使しうる，という主張は極端である。私は意味の集合態としての世界の中に組み込まれて存在し，そうした意味の集合態の中の或る意味へと自らの存在を適合せしめることによって，己れの現在を構築している。したがって，私の未来は，私の現在から出発して，私に到来するのであり，あるいは私は私の未来を，私の現在から，つまり私が世界の中で，或る有意味的存在者の意味へと己れの存在を適合せしめることによって構築している私の現在から，私の現在へと到来させるのである。

メルロ=ポンティが，「フッサールの用語を借りるならば，対象の措定的意識である『作用の志向性』，例えば，知覚的記憶においては『これ』を観念にかえる『作用の志向性』の背後に，これを可能にするところの『働きつつ

ある』志向性，つまりハイデッガーが超越と呼ぶものにほかならないものを，我々は認めなければならない。」[10] と述べている様に，人間存在は絶えず自己の現在，既に或る有意味的存在者の意味へと自己の存在を適合することによって，構築した自己の存在に基づく自己の現在を乗り越えて，別の有意味的存在者の意味へと己れの存在を適合せしめることによって，新しい自己の存在，新しい自己の現在を構築する。つまり，人間存在は絶えず，自己の現在を，自己の現在の彼方へと超越することによって，絶えず自己の現在を乗り越え，過去へと押しやるのである。それが，メルロ=ポンティの言う，現前野の乗り越えであり，私を取り囲む状況の存在的組み替えである。

そして，私の未来は，そうした私の現在を，つまり私が或る意味への私の存在の適合によって作り上げた私の存在に基づく，私の現在を乗り越える超越運動の彼方に有るのである。つまり，私による，私の現在の乗り越えによって，私と世界との存在的関係の組み替えを為す試みによって，私の未来は私の存在へと到来するのである。私が或る有意味的存在者の意味から私の存在を離脱せしめて，別の有意味的存在者の意味へと私が，私の存在を，あるいは私の現在を超越することは，私の超越が向かう別の有意味的存在者の意味へと私の存在を適合することによって，築き上げるであろう新しい私の存在，あるいは私の新しい現在を私の存在へと到来せしめるためである。

しかし，そうした私による，私の現在の乗り越えの運動は，既に世界の内に軌跡を描かれている私の到来すべき現在によって，素描されている。つまり，私の存在が組み込まれている意味の集合態としての世界には，私による私の現在の乗り越えによって，私に到来するであろう私の未来が沈殿しているのであり，諸々の有意味的存在者の意味は，私の超越が向かう「そこ」として待ち構えているのである。私の存在へと到来するであろう，私の未来は，世界の中に既に沈殿しており，私は世界から私の新しい存在を，新しい現在を贈与されるのである。

ハイデッガーは人間存在と世界との関係について，次の様に述べている。

10）M. Merleau-ponty : *op. cit.*, p. 478.

「現存在理解としての世界理解は自己理解である。自己と世界は，主観と客観の如き，また我と汝の如き二つの存在者ではなくて，自己と世界は，世界-内-存在という構造の統一における現存在自身の根本規定である。」[11]

ハイデッガーがこの様に述べている様に，人間存在と世界とは，近代的パラダイムにおける如く，主観と客観の様に二つの別々の実体なのではなく，人間存在の自己の在り方についての理解と世界についての理解は不可分離的な関係にある。自己の存在と世界は一つの物であり，自己のその都度の存在は，世界によって贈与されるのである。あるいは，自己のその都度の世界における存在は，世界の中に既に素描されているのであり，意味の集合態としての世界の中に沈殿しているのである。人間存在はそうした世界内の存在であることを止めて，世界から与えられる存在を拒否することは出来ない。世界は人間存在が自らの存在を築き上げる場であると共に，自らの存在の可能性が沈殿している場でもある。世界を構成している多様な有意味的存在者の意味は，その一つ一つが人間存在が己れの存在を構築するための契機であり，その一つ一つが人間存在の存在を素描しているのである。

ハイデッガーはそうした世界の性格について次の様に述べている。

「厳密な意味では，一つだけの道具は決して『存在』しない。道具が存在するには，いつも既にひとまとまりの道具立て全体がなければならない。この道具がまさにこの道具であるのは，このような道具立て全体においてなのである。道具というものは，本質上，≪……するためにあるもの≫である。この≪……するためにある≫ということには，有用性，有効性，使用可能性，便利性というようなさまざまな様態があるが，これらがひとまとまりの道具立て全体の全体性を構成している。」[12]

「道具がその存在においてありのままに現れてくるのは，たとえば鎚を揮って鎚打つように，それぞれの道具に呼吸を合わせた交渉においてのみであ

11) Heidegger : *G. A. 24, Die Grundprobleme der Phänomenologie*, Vittorio Klostermann, Frankfurt am Main, 1975, S. 422.

12) Heidegger : *G. A. 2, Sein und Zeit*, Vittorio Klostermann, Frankfurt am Main, 1977, S. 92.

るが，そのような交渉は，その存在者を出現する事物として主題的に把握するのではなく，ましてそのような使用が，道具そのものの構造をそれとして知っているわけではない。鎚を揮うことは，鎚にそなわる道具的性格についての単なる知識しかもたないだけではなく，それ以上適切には出来ないほどこの道具をすっかり自分のものにしている。」[13]

すなわち，道具存在を我々が使用する場合に，我々はその道具をより適切に使用するのであるが，そのことは我々が道具の有する道具の性格に，つまりその道具をどうすれば最も適切に使用することが出来るか，という道具の性格に適合することによって，我々が道具をより有効に使用しているのである。ハイデッガーは，こうした世界の分析において，現存在，つまり人間存在という主体の持つ主体としての本性による道具の意味付けに重点を置いているのであるが，つまり現存在から道具へと言う方向性から世界を分析しているのであるが，我々は道具から人間存在へと言う方向性を強調したい。すなわち，道具という有意味的存在者の意味は，既に無数の実存の痕跡として，相互主観的に規定されているのであり，そうした道具という有意味的存在者の意味へと人間存在が己れの存在を適合せしめることによって，道具はより有効に使用されるのである。有意味的存在者の意味は，それへと己れの存在を適合する人間存在の存在を，人間存在がそれへと適合する以前に，あるいはそれに意味を付与する以前に規定されている訳であり，それへと人間存在がどのように適合すればよいか，つまりどのように使用すればよいかは，世界によって既に規定されているのである。言い換えれば，鎚という道具，有意味的存在者の意味が，それを使用する人間存在に対して，それへの適合の仕方を要求しているのであり，人間存在はそうしたその存在者の有する意味へ，それが要求している通りに自らの存在を適合しなければならない。

すなわち，意味の集合態としての世界を構成する諸々の有意味的存在者の意味は，それ自身の中に，人間存在の，それを存在契機とした在り方を含んでいるのであり，あるいはそれへと関わる人間存在の行動様式をその中に有

13) Heidegger : *op. cit.*, S. 93.

しているのである。

そして，人間存在の周囲には多様な有意味的存在者が存在しており，人間存在は己れの現在から，つまり或る有意味的存在者の意味を契機として世界の中で己れの存在を確立している現在から，それらの有意味的存在者の集合態へと，己れの現在を超越して関わる場合に，人間存在は既に己れの次なる存在が素描されている意味へと己れの存在を投げ掛ける。例えば，ワープロを打っている私が，ワープロを打つのを止めて，電話をするために椅子から立ち上がり，電話が置いてある場所へと赴く場合に，ワープロを打つという私の存在，あるいは私の現在を乗り越える訳であるが，私の次なる存在はその時に既に，受話器という有意味的存在者の意味によってあらかじめ規定されているのであり，そのことを私自身も知っているのである。

未来という時間が未規定である，と言う場合に，私が自らの存在を超越する際に，私の存在を取り囲んでいる意味の集合態のどの意味へと私は自らの存在を適合せしめるか，あるいはどの意味を，次なる自らの存在の契機として選ぶか，と言う場合に，私の未来はまだ規定されてない，あるいは私は自由である，と言える。確かに，私には私の現在を超越する際に，次なる私の現在を構築するための意味を選択する自由を持っているのであるが，その場合も，私は私の現在から私の現在を超越することしか出来ないのであり，私の未来を私の現在へと到来させるための，意味の選択において，私が選ぶ意味の領域は限定されている。それは，私が意味の集合態としての世界の中に自らの存在を組み込ませているからであり，私が意味-内-存在として自らの存在を意味の集合態の中に置いているからである。人間存在は，ハイデッガーが言う様に，宙に浮いた存在ではなくて，世界の中に自らの居場所を得ているのであり，その意味において，人間存在はハイデッガーの言う世界-内-存在であり，我々の言う意味-内-存在なのである。

人間存在が，自己の存在を適合せしめている或る有意味的存在者の意味から，自己の存在を離脱せしめることによって，自己の現在を乗り越えて，別の有意味的存在者の意味へと向かい，新しい自己の現在を構築することを試

みる，自己の存在運動によって，自己の未来は自己へと到来して，新しい現在を築き上げるのであるが，そうした自己の現在の絶えざる乗り越えの運動は，世界に差異を産み出すことである。あるいは，自己の現在が形成する，世界との存在関係を差異化することである。例えば，私がワープロのキーボードを打つことによって，ワープロという有意味的存在者の意味へと私の存在を適合せしめることによって，構築していた私の現在を突き崩して，別の有意味的存在者の意味へと赴くことは，私とワープロとの存在関係によって構築した私の現在の中に差異を産み出すことであり，私がワープロから離れて，電話機へと向かい，それとの新しい存在関係を構築することは，私の存在において差異を生ぜしめることと共に，世界を構成する意味連関の中に差異を生ぜしめることである。何故ならば，それまで世界の片隅で，目立たずにひっそりと出番を待っていた電話機は，私がそれへと関わることによって，それの意味は世界の意味連関の中でひときわ目立ち始め，それに対して，それまで世界の意味連関の中で際立っていたワープロは，後ろへ退いて，他の意味連関の中に埋没する。私の研究室という世界における意味連関が，それらが世界を構成する諸契機として，世界の或る形態を維持しているのは，私という意味を意味として存立せしめる主体によってであるが，私という存在が逆に世界の意味集合態の中に組み込まれながら，私がそれらの意味連関をそれらとして維持せしめる以前に，相互主観的に規定された諸々の意味の中に，私の絶えざる存在運動によって，つまり絶えざる現在の乗り越えによって，差異を産み出すのである。私がワープロという有意味的存在者から，私の存在を離脱せしめることによって，私は電話機という有意味的存在者の意味へと私の存在を適合せしめ，そのようにして私は世界の中で新しい現在を作り出すのであるが，そのことは，私の研究室という世界の中で，ワープロが中心の意味連関を電話機中心の意味連関へと組み替えることであり，意味連関の中に差異を産み出すことである。私が私のかっての現在を超越して，新しい現在を世界の中で築き上げることは，そのように世界を構成する意味連関の中に差異を産み出すことである。

人間存在による自己の現在の絶えざる超越によって産み出される差異には，幾つかの段階があり，それらを同じ物とみなすことは出来ない。ここでは意味の主体であると共に，意味の集合態である世界に組み込まれていることによって，意味へと自分の存在を従属せしめている人間存在の存在の差異に主題を限定しよう。人間存在が自らの存在を或る有意味的存在者の意味へと適合せしめることによって，己れの存在を，つまり己れの現在を世界の中で構築し，次に，その存在の構成契機である有意味的存在者から己れの存在を離脱せしめて，別の有意味的存在者の意味へと己れの存在を適合せしめることによって，新しい自己の現在を構築する訳であるが，そのことによってそれまでの現在は，新しい現在によって追い越されて，過去へと移行する。既に述べた様に，過去は過去となることによって，消滅してしまうのではなくて，新しい現在をそれとして支えているのである。そのように現在を追い越して，それを過去へと移行させることによって，人間存在は自己の存在の中に差異を産み出す。つまり，そうした現在の乗り越えによって，人間存在は己れの在り方を変えるのであり，言い換えれば，己れの現在の構築の契機としての意味を変えるのであり，そのことによって，人間存在は自らの存在の中に差異を作り出すのである。

さらに，人間存在が己れの現在を乗り越えるもう一つ別の側面としての，自己の未来を己れの現在として到来せしめる場合にも，同じことが言える。自己の未来を自己の現在へと到来せしめるということは，人間存在が己れの現在を乗り越える，存在運動の二つの側面の一つである。つまり，自己の現在を乗り越える自己の存在運動は，一つには自己の現在を過去へと移行せしめる側面があり，もう一つには，自己の未来を己れの現在として，己れの存在へと到来せしめる側面がある。この二つの側面は，人間存在による現在の乗り越えとしての存在運動という一つの現象の裏と表の様に相即不離である。人間存在による現在の乗り越えによって，乗り越えられた現在は，新しい現在によって追い越されるので，過去へと押しやられて，新しい現在を支える。それに対して，現在の乗り越えによって到来する新しい現在は，自己の

存在へと到来する限りにおいて，それは未来であり，自己の新しい現在となることによって，それは現在である。別の有意味的存在者の意味へと己れの存在を適合せしめることによって，新しい現在を己れの存在へと到来せしめることは，やはり自己の存在の変更であり，自己の現在の構成契機である意味の変更という意味において，自己の存在を差異化することである。自己の可能的未来を己れの存在へと齎らすことは，自己の存在の変更であり，意味集合態としての世界の中に沈殿している無数の存在可能性の一つとして，人間存在が自己の存在として選んだものである。あるいは，世界によって贈与されたものである。世界による存在の贈与は，その中に組み込まれている人間存在が，その中に組み込まれて有ることによって，あるいはその中に組み込まれているが故に，自己の存在を絶えず乗り越えることによって変更する，自己の存在運動によって可能となる。世界の中に組み込まれている限りにおいて，人間存在は，世界の中に沈殿している無数の，過去の実存的行為の痕跡としての人間存在の存在可能性を，自己の存在運動に基づいて，世界から贈与されるのである。人間の存在運動は，無数の存在可能性を孕んでいる世界によって可能であると共に，またそうした無数の存在可能性の中から，絶えずそうした存在を自己へと齎らす，人間の存在運動によって可能なのである。時間はそうした人間存在の絶えざる存在運動によって成立するのであり，それは絶えざる差異の産出である。人間存在の存在運動によって，人間存在は絶えず世界から自己の存在を贈与されつつ存在しているのであるが，世界による人間存在への絶えざる存在の贈与は，人間存在の存在に絶えず差異を生ぜしめることを意味する。人間存在が絶えず，自己の存在を乗り越えることにより，世界は人間存在に絶えず新たな存在を贈与するのであり，そのことが自己の存在を絶えず差異化せしめることになるのである。

（3－7）

人間存在は既に述べた様に，絶えざる自己の存在運動によって，自己の存在に差異を齎らす限りにおいて，世界の中に存在の場を確保している。そう

した人間存在の存在運動によって齎らされる絶えざる差異化が時間である。人間存在の存在運動によって齎らされる差異は，人間存在の存在に刻印される差異であると共に，それは世界そのものの差異化である。人間存在が自らの存在の中に差異を齎らすことによって，人間存在の周囲世界にも差異が齎らされる。

私が私の存在を，あるいは私の現在を乗り越えることは，私が私の現在の構成契機である，或る有意味的存在者から自らの存在を離脱せしめて，別の有意味的存在者の意味を自己の存在に取り込んで，私の新しい現在を，あるいは新しい存在を築き上げることであるが，そのことによって，私は私の存在を差異化せしめるだけではなくて，私が自らの存在を確立している場としての世界をも差異化させる。私は私の存在運動において，私の現在を築いている契機としての，有意味的存在者を変更するのであるが，そのことが正に世界の構成契機である意味連関の組み替えを為すことであり，世界の中に差異を齎らすことである。私の周囲世界における意味連関は，私がその中に組み込まれている世界であると共に，私がそれらの意味連関をそれとして維持することによって，私の周囲世界の形態をそれとして維持しているのである。私が或る有意味的存在者の意味から離脱して，別の有意味的存在者の意味へと自らの存在を適合せしめて，私の新しい現在を構築する場合に，それらの意味連関の関係性に或る変更を齎らす。私は私の研究室入って来て，着ていた服をハンガーに掛けて，ワープロの前に座って，ワープロのスイッチを入れる，とする。その場合に，私はハンガーという有意味的存在者の意味に私の存在を適合せしめることによって，私は私の服をハンガーに掛けて，それからハンガーという有意味的存在者の意味から離脱して，ワープロという有意味的存在者の意味へと自らの存在を適合せしめるのであるが，ハンガーに私の服を掛けることによって，それまで私の研究室という世界には存在しなかった新しい有意味的存在者を，それまでの意味連関に付け加えるのであり，またワープロにスイッチを入れることによって，それまで作動していなかったワープロを作動させる。つまり，意味の集合態としての世界に新しい有意

味的存在者を付け加え，それまで作動していなかったワープロを作動させることにより，ワープロという有意味的存在者を意味連関の中に，あるいは意味の関係性の中に組み込むのである。ワープロは作動させることによって，有意味的存在者として他の有意味的存在者と意味連関を保つことが出来るのであり，したがって，ワープロのスイッチを入れることによって，研究室という周囲世界を構成している意味連関を多様にするのである。この様に，私という人間存在の研究室という周囲世界におけるこの様な存在運動によって，それまでの意味連関に新しい意味を組み込むことによって，周囲世界を構成している意味連関，あるいは意味集合態を差異化させるのである。

また，私が研究室を出るために，ハンガーに掛けていた服を取り，あるいはワープロのスイッチを切ることによって，それまでの研究室という周囲世界を構成していた意味連関から，意味を取り去ることを為す。つまり，服をハンガーから取り，ワープロのスイッチを切ることによって，それまで私の研究室という周囲世界を構成していた二つの意味契機を，意味連関から取り去ることによって，やはり意味連関としての周囲世界を差異化するのである。この様に，人間存在による存在運動，絶えざる自己の存在の乗り越えによって，人間存在の周囲世界は絶えず差異化されるのである。私の周囲世界を構成している意味連関は，私にその都度の私の存在を与えるのであるが，私は自己の存在運動によって，私の周囲世界の諸々の意味へと自らの存在を適合せしめることによって，その意味連関を絶えず差異化させるのである。あるいは，私の周囲世界は，私の存在を媒介にして，絶えずその意味連関を差異化させるのである。世界を構成する意味の集合態は，それをそれとして維持しつつ，それに関与する人間存在の存在運動によって，自らを絶えず差異化させるのである。

（3－8）

我々は既に，「Ⅱ 環境の空間性」において，[14] 人間存在と空間との関わり

14）拙著「環境のオントロギー」『徳山大学論叢第43号』所収，1995年，を参照。

について述べる際に，いままで述べて来た時間性を暗黙の内に導入していた。すなわち，人間存在が空間についての解釈図式を獲得する場合に，絶えざる自己の存在を突き崩して，新たな自己の存在を構築するために，自己の存在が根ざしている空間へと自己の存在を投げ掛けることを為す。そうした人間存在の未来へ向かっての自己の存在の投げ掛けによって，或る空間における自己の存在を自己へと到来せしめることが出来る。そのような，絶えざる自己の存在の空間への投げ掛けによって，空間についての図式を獲得することが出来るのである。こうした多様な空間において自己の存在を，つまり自己の現在を確立することは，我々が今まで述べて来た，時間性であり，したがって，人間存在が空間への企投において，或る空間を自己の存在を構築する場とすることは，人間存在の時間性に基づいているのである。人間存在が空間についての解釈図式を獲得することによって，自己が赴く空間についての予期を有するということは，その空間的場所において，いかなる自己の存在が確立されるか，ということの予期であり，いわば自己の存在を空間に投げ掛けることによって，自己へと到来せしめる自己の存在，あるいは自己の次なる現在についての予期である。何処に行けば何が有るか，ということの予期は，世界に根ざした人間存在の存在に基づいて獲得される空間についての解釈図式によるのであるが，そうした解釈図式の獲得は，人間存在の時間性にその可能性の基盤を持っているのである。多様な空間において，自己の存在を，あるいは自己の現在を確立することが出来るのは，人間存在が絶えず自己の現在を突き崩して，新たな自己の現在を構築する存在運動に基づくのであり，そうした人間存在の存在運動，つまり存在の時間性によって空間についての解釈図式が獲得されるのである。

空間についての解釈図式は，言い換えれば，意味の集合態としての世界についての理解に基づく解釈図式であり，それは一面では今述べた様に，人間存在の存在運動によって確保されるのであるが，つまり人間存在の時間性によって得られるのであるが，もう一面では，意味の集合態としての世界による人間存在への存在の贈与によって得られるとも言える。人間存在の世界に

おける存在運動は，世界を構成する多様な意味の集合が，絶えず人間存在にその存在を与えることによって可能なのである。そのどちらがより根源的であるのか，については明確には言えない。世界を構成する多様な意味の集合態は，過去の無数の人間存在の無数の存在運動によって成立したのであるが，しかしそうした無数の人間存在の無数の存在運動も，それ以前の世界の中に既に存在していた意味の集合によって可能になった訳であり，遡って行けば結局原始時代の剥出しの自然としての世界に行き着く。しかし，そうした剥出しの自然の中に意味が存在しなかったかと言えば，そうでは無い訳で，木々に豊かに成熟している果実や，草原の様々な動物や，海の中の多様な幸等は，やはり原始人にとっては意味を有していたのであり，あるいは彼等が住んでいた洞窟や彼等が纏っていた動物の皮なども有意味的存在者であった訳で，この様に考えると，人間存在の存在運動と世界を構成する意味の集合のどちらがどちらの根拠であるのか，あるいはどちらがどちらを可能にしたのか，ということは言えないのである。

そうした世界を構成する意味の集合による人間存在への存在の贈与によって，人間存在は多様な存在運動を為している訳であるが，そうした人間存在の存在運動によって，つまり時間性によって，世界を構成する意味の集合が理解されるのである。言い換えれば，世界による存在の贈与と人間存在の存在運動によって，人間存在は絶えず，様々な空間的場に自己の存在確立の場を得るのであるが，そのことによって，無数の存在運動の結果としての世界における意味の配分の規則性の理解が獲得されるのである。それが空間についての解釈図式であり，人間存在に彼の存在を，あるいは彼の現在を与える規則性なのである。

（3－9）

フォン・ヘルマンは，彼の著書である『意識，時間，世界理解』の中で時間について次の様に述べている。

「我々がまなざしの中で捉えた世界時間（Weltzeit）の最初の規定は，世

界に拡がる今（weltweite Jetzt）である。普遍的同時性において，世界に拡がる今は世界に拡がる現前である。同一の普遍的今は，すべての同時間的存在者を包括し，そしてすべての同時間的に存在する人間によって，一つのそして同一の世界に拡がる現前として理解される。」[15]

「すべてを包括する現在における我々の存在は，理解しつつ現在へと開かれた存在を通して規定される。世界的に拡がる現前への理解しつつの開けにおいて，我々は我々の交渉しつつ-経験する意義連関において，我々の周囲世界の事物へと，現前しつつ関わっている。世界的に拡がっている現前の概念において，我々は世界的に拡がる現在と世界的に拡がる空間とをかすがいで止めることを考えている。人間の『主観性』は，理解しつつ時間的空間的広がりのうちへと置かれた人間から思惟されなければならない。時間と空間がその全体的開けのうちへと置かれた人間から思惟されなければならない。時間と空間がその全体性において世界の第一の契機である限り，空間の開けと時間の開けは，人間の世界の開けと同意義である。すべての内時間的そして内空間的現象がただ，世界の時間の，そして世界の空間へのその根付きからのみ把握すべきであるが如く，また内世界的事物の存在の人間的理解，その時間-内-存在とその空間-内-存在の人間的理解が，固有な時間-内-存在と空間-内-存在の理解の如く，世界の開け（Weltoffenheit）から規定されなければならない。」[16]

この様にフォン・ヘルマンは，時間を世界を包括する広がりにおいて捉えている。しかし，常識的に理解される時間は全地球を包括しており，全地球的規模で今という瞬間を人間は共有している，と言うことを，フォン・ヘルマンは基礎付けていない。既に述べた様に，私という人間存在が現在という時間を世界の中で確立しているのであり，私の現在は私にのみ帰属する訳である。あるいはフッサールやメルロ=ポンティの言う時間意識も，私の意識

15）Von Hermann : *Bewusstsein, Zeit und Weltverständnis*, 1971, Vittorio Klostermann, Frankfurt am Main, S. 43.
16）*Ibid.*, S. 48.

が捉えている現在である。そうであるならば，そうした個々人が己れの存在において捉えている時間が，世界を包括する時間である，と主張することは，個人から世界へどのようにして拡がるのか，によって基礎付けられなければならない。

私は他者との共存在として，世界の中で，多数の他者と共に存在している。他者と共に居るこの世界は相互主観的世界であり，私にとっても他者にとっても世界は同じ形態として現れる。あるいは私と他者は意味を共有しており，私にとっての意味と，他者にとっての意味は同一である。したがって，私が或る意味を媒介にして築き上げる存在と他者が同じ意味を介して作り上げる存在は，同じ存在であり，我々は同一の意味へと関わる，その関与の仕方は同一である。例えば，私が目の前に存在するコーヒーカップを手に取って，その中のコーヒーを飲むという存在を構築する仕方と，他者が他者の目の前に存在するコーヒーカップを取ってコーヒーを飲むという存在を構築する仕方は同じである。私と他者は，そのように，様々な意味を共有することによって，相互に互いの存在を理解しているのである。[17] 私は私の目の前に居る他者がコーヒーを飲んでいることを理解するし，また他者も私がコーヒーを飲んでいることを理解していると信ずる。この信ずるということには，確固とした理論付けは出来ないが，つまり他者が私の存在についての理解を持っていることを理論的に説明することは出来ないが，他者のコーヒーカップとの関わりによって構築する他者の存在を見て，他者は私が他者と同様にコーヒーカップに関わって構築する私の存在を理解していると思うのである。この信ずるとか思うということが，世界の時間性，あるいは世界が自らを差異化していると言うことの根拠になるのである。私は全世界を神の目の如く，鳥瞰することは出来ない。それでは私はどのようなプロセスを経て，世界全体が絶えず時間化している，つまり差異化していると信ずるのであろうか。我々は，様々な意味への関わりを介しての他者が己れの存在を構築する，その存在を理解する。それは私と他者が意味を共有しているからであり，或る

17）詳細は拙著『意味の現象学』の第四章，ミネルヴァ書房，1994年，を参照のこと。

有意味的存在者の意味が，私にとってと他者にとってで同一であるからである。私の眼前の他者は，他者の目の前のコーヒーカップを手に取って，口へ持って行き，その中のコーヒーを飲むし，私も眼前のコーヒーカップを取ってコーヒーを飲む。この様に，同じ意味を有する有意味的存在者へと関わる関与様式が私と他者と同一であり，そのことが二人が同一の意味を共有していることの根拠である。

この様にして，世界には他者とその意味を共有している有意味的存在者が連関を為しており，その意味の連関は私の視野に入る私の周囲世界を超えて，世界の果てまで続くのを知っている，あるいは意味の連関が世界の果てまで続いていることを信ずる。確かに私は，既に述べた様に，或る有意味的存在者の意味へと私の存在を適合せしめることによって構築する私の現在からしか世界を知ることは出来ない，あるいはそうした私に対してのみ世界は自らを開示する。しかし，私の中では過去の統合が為されており，私の現在からでは知ることの出来ない世界の相貌を，私は私の過去を総合することによって，私が知っていることを自覚する。既に述べた様に，私の過去は私の現在を支えており，あるいは私が或る有意味的存在者の意味へと自らの存在を適合せしめることによって構築している私の存在を支えている。と言うことは，私は自らのその都度の存在を，或る有意味的存在者の意味へと適合せしめることによって構築することの中に，私の過去を総合して保持しているのである。勿論，そのことを私が自覚しているか否かは別問題であり，私はその都度の自らの存在を構築する際に，無自覚的にそうした私の現在を支えている私の過去を引き合いに出して，自らが構築した私の現在から世界を見ているのである。その場合に，私が，私の存在から，あるいは私の現在から見ている制限された視野に入っている世界の彼方にも世界が拡がっており，したがって意味の連関は，私の視野，あるいは私の現前野を超えて無限の彼方に拡がっているということを私が知っているのは，私が有意味的存在者の意味を介して構築した私の現在において，私の現在を支えている私の過去が総合されているからであり，私は私の現在の中に総合されて，私の現在を支

えている過去を通して世界を見ているからである。私は私の過去において，世界の様々な空間的場から世界を見た訳であり，そして，意味連関は世界の至る所で世界の構成契機となっていることを，そうした過去が私の現在において総合されることによって，私の現在から世界を見る場合に，私に対して開示される世界と重なりあうことによって，私は知っているのである。私の過去が私の現在を，あるいは私が或る有意味的存在者の意味へと己れの存在を適合せしめて構築する私の存在を支えていることによって，私は私の現在から，あるいは私の存在から見ている世界の相貌に，私の現在，あるいは私の存在の中に総合されている過去を重ね合わせて，私の現在に対して開示される世界の彼方にも意味の連なりが拡がっていることを知るのである。

そして，そうした意味連関の広がりが，そうした意味連関へとそれぞれの存在を適合せしめて，それぞれの存在を世界の中で確立する人間存在の意味への関与形態の共通性を保証しているのである。何故ならば，世界へと拡がる意味の連なりは，私が己れの存在を適合せしめて，私のその都度の現在を構築する意味の連なりと同一であるか，あるいは共通性を有しているが故に，私の視野を超えた彼方においても，人間存在が意味へとそれぞれの存在を適合せしめて，それぞれの現在を，あるいはそれぞれの存在を構築していることを私は知っているからである。つまり，世界の何処においても，人間存在は私の周囲世界に有る意味と同一の，あるいは共通する意味へとそれぞれの存在を適合せしめて，それぞれの存在を，それぞれの現在を構築しているのである，ということの保証がこのことで得られるのである。そして，世界の何処においても，人間存在は絶えず自己の現在を，あるいは自己の存在を乗り越えて，自己の存在を差異化させ，それぞれの周囲世界を構成する意味連関の中に差異を産み出していること，つまり自己を時間化し，世界を時間化していることの保証が得られるのである。つまり，世界において無数の人間存在が絶えず自己の存在を差異化し，世界を差異化しているのである。

こうした我々の論証によって，先に述べたフォン・ヘルマンの言う世界を包括する時間の存在に行き着くことが出来るだろうか。フォン・ヘルマンは，

今が世界に広がっており，同一の瞬間を全世界の人々が共有している，と述べているのであるが，我々の論証に依れば，それぞれの人間存在がそれぞれの現在を世界の中で構築し，それを絶えず突き崩して，新しい現在を構築している，と言うことが論証された訳であり，フォン・ヘルマンの主張とは違う結論になったのであるが，つまり，それぞれの人間存在はそれぞれ独自の現在を構築し，それを崩してそれぞれの未来を自己へと到来せしめている，ということが論証された訳で，すべての人間存在を包括する時間性という概念には到達しなかった。しかし，我々の論証で言えることは，無数の人間存在による，そうした絶えざる意味への適合と，それからの離脱によって，全世界が絶えず自らを差異化させており，あるいは時間化させている，と言うことは言える訳である。つまり，無数の人間存在が絶えず意味へと適合し，意味から離脱する存在運動を為している訳であり，そのことは世界が絶えずその意味連関を差異化させることにより，一瞬前の意味の秩序の中に差異を産み出して，一瞬後の世界の意味秩序の産出は，一瞬前の秩序が差異化されたものとして，一瞬前の意味秩序とは異なる意味秩序を有する世界と成ることを意味する。

（3 −10）

我々が日常的に関わる時間は，今まで述べた存在の時間性や世界の時間性よりも，時刻としての時間である。時刻としての時間は，我々の日常性の中でどのように発生して来たのだろうか。ハイデッガーは次の様に述べている。

「日常的な配視的配慮にとって，≪時間≫というようなものは，さしあたりどういうありさまで現れてくるのであろうか。道具を使用する交渉において，我々が表だって≪時間≫に接するのは，どのような交渉においてであろうか。我々は，世界が開示されているとともに時間が公開されていると述べた。さらに，世界の開示性と共に内時間的存在者も既に発見されており，そして，現存在が己れを考慮しながら時間を計算している限り，内時間的存在者の発見と共に≪時間≫もいつも既に配慮されている。従って，≪ひと≫が

あらためて時間を参考にする行動とは，時計の使用に含まれている行動である。その行動の実存論的=時間的意味は，移動しつつある時計の使用に含まれている行動である。時計の針のその都度の位置を現前しつつ辿る時に，我々は何かを数える。（中略）時間とは，移動しつつある時計の針を現前的に数えつつ辿る時に現れてくる数えられたものであり，そのさい，この現前は，≪前に≫と≪後で≫の方へ地平的に開かれている把持および予期との脱自的統一態において時熟するのである。」[18)]

我々は日常的には，常に時計の針の位置から時間を考慮しつつ，自己の振る舞いを時計の針に合わせて計測する。既に述べた様に，我々は自己の存在運動として，意味へと適合し，意味から離脱することによって，自己の存在の中に差異を産み出し，世界の意味秩序の中に差異を産み出す。そうした我々の時間性は日常的には覆われていて，我々は時計という時間測定器によって時間というものに関わり，自己の振る舞いを時計の針に合わせている。時計で測定する時間は，自己にとっても他者にとっても共通であり，そうした時間測定器によって測られた時間は，我々の存在運動としての時間性における時間の独自性は失われて，他者との共通項である数字によって時間は測定されるのである。そうした数字へと時間性というものが還元される必要性は，我々が共同存在として，他者との共同において存在していることによる。すなわち，我々は自己の存在，自己の現在を，他者との共通項へと還元することによって，自己の存在運動を自他共通の基盤において他者に伝達する必要性が有るからである。私が有意味的存在者の意味と共に構築する存在，あるいは現在の伸び広がりは，私独自の伸び広がりであり，それ自体は他者との共通項は持たない訳で，それを時計によって計測される数字へと還元することによって，私の存在の伸び広がりは，自他共通の基盤へと還元されるのである。

そのように，相互主観的存在としての人間存在が，自らの存在の基盤としているのは世界の構成要素としての意味の集合であり，既に述べた様に，人

18）Heidegger : *op. cit.*, S. 420f.

間存在が他者と共有している意味を介して相互の存在についての理解が成立するのであり，そこに自己と他者が共同存在として世界の中に存在しうる基盤が有る。時間を数字で表わすことは，時間を自他共通の意味とすることである。各々の存在運動としての絶えざる自己の現在を構築し，それを崩すこととしての自己の存在の差異化，世界の意味秩序の差異化はそれ自体として自他共通の意味によって秩序付けられていないが故に，そうした自己の存在の差異化，世界の意味秩序の差異化という事態を他者との共通項において表現するためには，時間の意味化としての時計によって計測される数字化された時間によって表現するしかない。その場合に，私が私の存在の或る差異化としての存在運動，すなわち或る有意味的存在者の意味への己れの存在の適合，それからの己れの存在の離脱を数字化する際に，私は自分の存在運動としての差異化という私の存在のダイナミズムは平板化されて，私の存在の中に生起する，私の存在の差異は数字の中に隠蔽されてしまう。例えば，私が「私は国会図書館へ行くのに50分かかった」と言う場合に，私が自分の家から出て，電車に乗り，地下鉄に乗り換えて，国会図書館に到着すると言う，私の絶えざる存在運動のダイナミズムは隠蔽されて，50分という数字化された時間――それは私が私の家から国会図書館までの間の時間的距離のみを表現しているのであるが――だけが表明されているにすぎない。つまり，起点と終点との間の時間的距離のみを表わしているにすぎない。そこで言明されている中には，私の独自の存在運動としての私の存在の中に絶えず差異を産み出し，それに基づいて世界の中にも差異を産み出す，という時間の根本的性格が消失しているのである。

（3－11）

我々はその様に，日常的には時計の針の位置が示す数字化された時間から時間というものに関わり，あらゆる事柄を数字化された時間によって測定することに慣れている。そして，我々は自らの存在運動をも数字へと還元して，相互主観的な存在基盤を構成する意味の層へと自らの存在運動を重ね合

わせる。そうした中で，我々は数字化された時間についての解釈図式を作り上げる。

そうした時間についての解釈図式はどのように形成されるのであろうか。そして，時間についての解釈図式は，我々が時間的存在として自らの存在運動を為す場合に，どのような効果を我々に齎らすのであろうか。

バーンスタインは，次の様に述べている。

「すなわち，理解の循環は『客観』へと方向付けられている，つまり理解の循環は，我々が理解しようとしているテクスト，制度，慣習，生活形式などへ，我々を向かわせる，という点がそれである。理解の循環は，その循環における部分と全体との微妙な弁証法的遊戯に向かわせる。解釈学的循環の標準的な性格付けの多くは（そして前期ハイデッガーも），我々が理解しようとしているテクストや現象における部分と全体との関係にもっぱら注意を向けている。」[19)]

解釈学で問題になる解釈の循環の問題がここで述べられているのだが，こうした解釈の循環は，我々の問題地平においては，意味の集合態としての世界についての理解と，その中に組み込まれている自己存在についての理解との関係として問題になる。ハイデッガーは，人間存在（現存在）の自己理解と世界についての理解とは不即不離の関係にあり，世界についての理解が即自己についての理解に繋がり，両者は切り離すことが出来ない，と述べている。

我々の立場からするならば，私の存在，すなわち或る有意味的存在者の意味へと自らの存在を適合せしめることによって確立している私の存在についての理解は，私が組み込まれている意味集合態としての世界についての理解に基づく，ということになる。すなわち，私が自らの存在を構築している，私の存在の契機としての意味が，意味集合態としての世界においてどのような機能を果たしているのか，それの世界における位置価はどのようなもので

---

19) Bernstein : *Beyond Objectivism and Relativism*, 1983, the University of Pennsylvania Press, p. 135.
邦訳『科学，解釈学，実践Ⅱ』丸山高司他訳，岩波書店，1990，291ページ。

あるのか，ということについての理解は世界についての理解に基づく訳であり，それに基づいて私は私の存在を理解しうるのである。つまり，私が今何をしているのか，という私の存在についての理解は，私の存在の構成契機である意味についての理解，つまりその有意味的存在者の意味は世界の構成契機として，どのような機能を果たしているのか，あるいはどのような機能値を世界の中で有しているのか，ということについての理解に基づき，そのことは私が組み込まれている世界についての理解に基づく。すなわち，理解の方向性は世界→意味→自己という方向性として理解される。

それでは自己の存在についての理解が基づいている世界についての理解は，どのようになされるのだろうか。オットー・フリードリッヒ・ボルノウは次の様に述べている。

「この生の理解のなかには，いまや，我々の問いをさらに継続するような可能性もまた含まれている。ディルタイもハイデッガーも，生と世界のこの理解作用はいつも理解する者の共通性を前提にしているということを指摘した。人間がともかく世界の中へ生み出されて，この世界の中で理解しつつ勝手を心得ている限り，人間はこの世界を他の人間との共同の世界として見いだすのである。またこのことは同時に次のこと，すなわち，この世界を理解するということはまた，個々人が彼のまわりの人々と分かちあっている共通の理解作用だということが含まれている。『すべて理解されたものは，いわば，かかる共同性そのものからの熟知されたもののしるしを帯びている。我々はこの雰囲気の中に生きており，この雰囲気が我々を絶えず取り巻いている』と，ディルタイは言う。我々は，この『媒体』の中に『すっかり浸されて』いるのである。つまり，世界の中で人間に起こることの理解はすべて，一つの共通理解であり，それゆえ同時に，この共同の世界に対して振る舞う中で人間が相互に理解し合うことを意味している。」[20]

個々の有意味的存在者の意味についての理解は，世界についての理解に基づく，と言うことについては既に述べた。そして世界についての理解は，ボ

20）ボルノウ『解釈学研究』西村皓・森田孝監訳，玉川大学出版部，1991，35ページ。

ロノウが述べている様に，他者との共同存在において為される。我々は意味の集合態としての世界の中に組み込まれていることによって，世界からその都度の存在を与えられて，世界の中で自らの存在を，あるいは自らの現在を構築しているのであるが，我々が無自覚の内に得ている世界の中への組み込み様式は，他者との共同存在の中で獲得したものである。個々の有意味的存在者の意味への我々の存在の適合様式は，他者によって与えられたものである，と言ってよい。我々は幼児の時から他者による意味への振る舞い様式から，世界への適合の仕方を学んだ訳であり，その意味において，世界への組み込み様式は相互主観的な存在性格を有しているのである。我々による個々の意味についての理解は，主観-客観様式という近代のパラダイムの中で為されるのではなくて，我々の存在が意味へと適合することによって，つまり我々の身体によって獲得されるのである。意味の理解は，主観が客観を認識する様にして為されるのではなくて,. 我々の身体が有意味的存在者の意味を把握することによってである。箸という存在者の意味を我々が理解したのは，箸を使用することによってであり，箸を認識の対象として知ることによってではない。つまり，我々が意味を理解するのは，その意味を自らの存在を構築する契機と為した場合に，すなわちその意味へと己れの存在を適合せしめることによって，自らの存在を構築した場合に，その意味は我々によって理解されるのである。そして，我々によるそうした諸々の意味の理解は他者と共有している。つまり，私が或る有意味的存在者の意味へと己れの存在を適合して，己れの存在を構築する場合に，その適合様式は他者と共通でなければならない。私が箸を使用するその仕方は，他者の箸の使用の仕方と共通でなければならず，もし私が他者と違う箸の使用の仕方をした場合には，私は私が自らの存在を組み込ませている世界の中で異邦人とみなされる。また，そうした箸という有意味的存在者がその構成契機となっている世界への私の存在の組み込み様式も，他者と同じであるはずであり，つまり世界についての私の理解も他者と共通でなければならない。

従って，我々は自らの存在を組み込ませている世界から世界を理解しなけ

ればならない。つまり，我々の世界の中での，世界の構成契機である諸々の有意味的存在者の意味への適合を為すことによって，世界の中で自らの存在を築き上げているその私の存在から世界を理解しなければならない。既に述べた様に，世界は自らを，意味への私の存在を適合せしめて自らの存在を，あるいは現在を築いていることに対して開示する。それ故に，私の世界理解は私が世界の中で，意味を媒介として構築している私の存在からのみ可能である。

そうした世界についての理解に基づいて，時間についての解釈図式が成立する。我々は自己の存在の確立とその瓦解の組み立てを毎日為して，我々の日常性を形成しているのであるが，そうした自己の存在の一連の形成は，我々が自らを世界の中に組み込ませていることに基づく，時間についての解釈図式に依って為される。時間についての解釈図式は，空間についての解釈図式の場合と同様に，人間存在が自らの存在を世界を構成する意味の連関の中に組み込むことによって獲得されるのであるが，ただ時間についての解釈図式の場合は，解釈される時間が時計の針によって示される時刻として分節された時間に基づいて為されるのであり，それが基づいている人間の存在運動としての時間についてではない。人間存在による意味への己れの存在の適合とそれからの離脱という，己れの存在の差異化と，それが齎らす世界の意味秩序の中に差異を生み出す，人間存在の存在運動が相互主観的な，つまり自他共通の数字化された時間へと変貌した時間に基づいて解釈図式が作り出されるのである。そして，数字化されて，時刻となった時間についての理解は他者との共存という相互主観的な存在において為される。我々は朝，日の出に前後して目覚め，一日の活動を開始し，夜日没前後に一日の活動を終える，と言った，毎日の行動パターン，あるいは意味への適合のパターンは，時計によって計測される数字化された時間を常に配慮しながら為される。そうした行動パターンは，相互主観的な存在において，つまり他者との共存の中で獲得される。すなわち，朝目覚めて，夜眠るという，人間存在の一日の行動パターンの基本的な枠組みは，世界を構成する意味秩序を維持する人間存在の相互主観的な存在様式の中に何世紀もの間に沈殿している人間存在の基本

的な存在運動であり，そうした枠組みを我々は他者との共同存在において獲得するのである。それは，現在では時刻として我々に与えられている数字を意味化することによって，その存在運動のパターンがより正確になっている。時刻としての数字化された時間は，相互主観的に意味化されて，我々の存在運動の基準になっている。例えば，正午は昼食を取る時間だとか，夕方の五時は仕事を終える時間であるとか，いった様に個々の時刻は意味化されることによって，我々の根源的な時間性に秩序を与えている。時計によって計測され，数字化された時間は，人間存在の時間性，すなわち意味を介した自己の存在の構築と，意味からの離脱による自己の存在の破壊による自己の存在の差異化，世界の意味秩序の中への差異の導入と言った人間存在の存在運動としての時間性に基づく。つまり，人間存在が本来時間的存在であるが故に，時計によって計測され，数字化された時間が成立したのであるが，そうした時計によって計測された時間は，今度は逆に人間存在の存在運動としての根源的時間性に秩序を与える。すなわち，我々は一日の間に多様な有意味的存在者の意味と関わることによって多様な存在を構築するのであるが，そうした我々の意味への関与に秩序を与えて，多様な意味への関与を時間的に分節する働きをするのが，数字化された相互主観的時間である。数字化された時間は，人間存在の根源的時間性としての存在運動，あらゆる物に差異を導入する差異化の運動を平板化して，本来の時間が有する動性を喪失せしめるのであるが，しかしそれ故に，数字化された時間はあらゆる人間存在の存在運動に適用することが出来る。数字化された時間は，人間存在の存在運動としての時間の様に，豊かな内容を持っていないが，むしろそうした豊かな内容が脱落した形式であるが故に，あらゆる人間の存在運動に適用することが出来る。人間存在はそうした，人間存在の存在運動という根源的時間からいわば派生した数字としての時間を己れの根源的時間としての存在運動に導入することによって，己れのそうした存在運動を数字化するのであるが，そうすることによって己れの存在運動を時間的に秩序化することが出来る。つまり，数字化された時間は，人間存在の存在運動という根源的時間から派生したの

であるが，それを人間存在が己れの存在運動へと導入することによって，そこから派生した数字化された時間は，自らが生まれた母体へと還帰するのである。そしてそのことによって，数字化された時間は己れが派生した母体としての時間性に秩序を与えるのである。

それ故に，時間についての解釈図式は，相互主観的な存在において獲得した物として，人間存在が己れの存在運動の秩序付けにおいて，自己の存在の中に導入する意味への適合の順序付を為す。時間についての解釈図式に基づいて，我々は多様な有意味的存在者の意味へと適合する前後関係を配慮するのである。

また，時間についての解釈図式は，様々な有意味的存在者の意味へと我々の存在を適合せしめる場合に，個々の意味への適合による己れの存在の伸び拡がりの間をどれくらいの間とするか，ということについての大まかな基準を我々に与える。例えば，私が歯ブラシという有意味的存在者の意味へと，私の存在を適合せしめることによって，私は歯を磨くという存在を構築する訳であるが，歯ブラシへの私の存在の適合による歯を磨く「間」としての数字化された時間も，私は時間についての解釈図式から獲得する。諸々の有意味的存在者の意味への人間存在の存在の適合の「間」としての時間の基準は，相互主観的な存在において獲得した時間についての解釈図式に基づいているのである。

（3－12）

既に述べた様に，人間存在は意味の集合態としての世界の中に組み込まれていると共に，何らかの社会システムに帰属している。人間存在の世界における時間性と，社会システムにおける時間性とは当然，異なっている。世界において，人間存在は自己の存在運動として，絶えず世界から存在を与えられつつ，自己の存在を構築し，それを崩しながら自己の存在を差異化し，世界の中に差異を導入している。そうした時間性を測定するために人間存在は，そうした根源的時間から派生した時計によって計測される数字化された時間

を導入して，自己の存在の伸び拡がりを数字化して，相互主観的な基盤としての意味と化する。時間についての解釈図式は，そうした数字化した時間を意味化することであり，数字としての意味を日常生活における生活サイクルでの人間存在の存在運動との関連において意味を付与する。そうしたことに基づいて，人間存在は一日の自己の存在運動を時間的に配列するのである。

社会システムに帰属している人間存在も，同様に自己の絶えざる存在運動を為しているのであるが，そうした人間存在に対して社会システムは，そこに帰属している人間存在に数字化された時間の枠組みを与えて，人間存在の社会システムの中での存在運動を，その時間的枠組みの中で，系列化して，一貫した意味への適合の連続性を，つまり個々の意味への適合による存在構築の連続性の組み立てを与える。すなわち，或る有意味的存在者の意味への適合による存在構築に続く，別の存在構築の系列を繋げて，或る全体的な存在構築の連続を構成し，それをそのシステムに帰属する人間存在に付与する。そして，それをあらかじめ与えた数字化された時間的枠組みの中で完成することを要求する。そのことによって，それに帰属する人間存在は，システム内の構造的に配列された意味連関へと秩序立った適合を為して，連続的な存在構築の連関を作って行く。システムの時間性は，人間存在の存在運動としての時間性を，人為的に組み立てて，それの繋がりの連続性を構成して，一貫した系列とする所に有る。そして，そうした時間性の人為的な構成の系列の幾つかを構造化して，全体としての相互主観的行為構造を形成して行く。相互主観的行為構造は，従って，その様に組み立てられた存在運動の系列の幾つかを組合せて，全体としての一纏まりの系列の組合せを意味する。そして，一つ一つの存在運動の系列を，我々は役割と呼ぶ。役割とは，従って，時間的側面から言うならば，或る存在運動の連続の組み立てであり，人為的な存在運動の系列の連続性の構成を言う。そうした系列の幾つかが一纏まりに成って，完成された全体としての行為構造が出来上がるのである。

役割について廣松渉は次の様に述べている。

「人間の行動というものは殆どが他者（達）の期待に応えてのものになっ

ている。尤も，他者（達）の期待といっても，当の他者達自身は“当然的・自然的”な余り，自分が期待を差し向けていることを顕在的には意識していない場合をも含みうる。（中略）

＜他者によって期待されている行動の――触発的に現前する当事他者に対向しての――呼応的遂行＞，この間主観的に共軛的な関係性における実践を『役割行動』と呼ぶことにしたいのである。このさい，筆者としては，ステイタスやポジションを前梯にしてロールを云為する一部社会学者たちとは異なり，直接的・基底的な自他関係に即して『役割』という概念を規定していることに留意ねがいたいのであって，筆者に言わせれば，『地位』や『部署』というものは，役割行動の機能的編成態が物象化され，一種の“制度化”をこうむることによって事後的に成立する。尤も，日常的現実においては『地位』ないし『部署』が既成的に確立している部面が多く，この既成性を前梯にしてしかるべき行動の期待がおこなわれるのがむしろ普通になっているのも確かである。このことを勘案して，『地位』ないし『部署』の既成化に照応する次元での役割演技を特に『役柄』扮技と呼ぶことにし，必要なさいには『役割』一般から『役柄』を次元的に区別することに致したい，云々。」[21]

「われわれは原理的には『役割的行動』の『役柄・部署・地位』への先行性を主張するが，用在世界という“人生劇場”における日常的・既成的な場面では殆どありとあらゆる行動が社会学者流に言えば status and role（地位と役柄）に応じた役割演技として営まれているのが現実である。（中略）個々の『役割（役柄)』なるものはネットワークの反照的規定態として存在する。――現実問題として，いわゆる経済活動や政治活動の具体的・現場的な営為が status and role に応じた役割演技として営まれていることは言わずもがな，挨拶などの日常的な儀礼行為からして演技であり，食事の仕方や排泄の仕方のごときまで，人間行動の様式は文化共同体に内属する他人たちによって期待されている行為方式に応ずる役割演技の構制になっており，まさに『呼吸の整え方』から『箸の上げ下ろし』に至るまで，人間行動は悉く

21）廣松渉『存在と意味』第二巻，岩波書店，1993，100～101ページ。

役割行動として営まれていると言っても過言ではない。」[22]

すなわち廣松渉は，役割行為を他者の期待に応ずる振る舞いを演ずることと定義しており，それは「役柄」や「部署」「地位」に先行するものであると規定している。役割をそうした社会的な地位や部署と規定することは，役割というものの物象化であり，制度化であるとする。

こうした廣松の論に対して，我々は我々の立場から何らかの反論をしなければならない。我々は役割というものを，意味の多様態の中での各々の限定された意味領域への関与形態であると論じてきた。[23] すなわち，世界における意味の多様は，多様な実存の痕跡によるのであり，そうした多様な有意味的存在者が世界の構成契機として，人間存在の世界の中での多様な存在を支えているのであり，またそれを可能にしているのである。多様な実存の痕跡としての意味の多様性は，その中に己れの存在を組み込ませている人間存在の，世界における存在の多様性を保証しているのである。意味の集合態としての世界の中に組み込まれている人間存在はそうした意味の多様を維持して，世界の今の形態を保つことを世界から要請されている。そのためには，我々は多様な意味集合態の全体に絶えず関わり，それらを我々の日常的な存在構築の媒体としなければならない。或る意味を世界の構成契機として維持し，それが世界の構成契機であることから脱落しない様に，それが世界に留まることを維持するためには，世界の意味構成の中に組み込まれており，そこから絶えず自らの存在を贈与されている人間存在が絶えずそうした意味へと関わり，それを己れの存在構築の契機にする必要が有る。意味を支え，それが世界の構成契機であることを維持するのは人間存在であり，人間存在が相互主観的に意味を己れの存在の中に取り入れて，それを己れの存在構築の媒体とすることによって，その意味は世界の構成契機であることを止めないのである。従って，我々の言う世界とは，単に有意味的存在者の集合態のことではなくて，それらを支える無数の人間存在のそれらへの関わりによる存

22）廣松渉，同書，106～107ページ。
23）拙著「環境のオントロギー」「環境のオントロギー Ⅱ」参照。

在運動も含めている。そして役割とは，そうした世界が今の形態を維持するために，その中に組み込まれている人間存在の存在運動が関与する意味領域を限定することによって，相互主観的な人間存在の存在運動にその関与領域を配列し，各々の人間存在の関与領域を世界の構成契機としての意味全体にわたる様に，人間存在の存在運動を分節することによって生ずる世界への関与形態である。そして，そうした意味領域を個々の人間存在に配分するのがシステムである。システムは既に述べた様に，個々の人間存在の存在運動が関与する意味を限定して，個々の人間存在の存在運動に一貫性を与えて，それを系列化して，システム全体においておのおのの存在運動を一纏まりの行為構造を組み立てることを為す。そのように個々の人間存在に意味への関与形式を系列化したのが，我々の言う役割である。そして，そうした関与形式の系列化の制度化されたものが，地位であり部署である。

従って，廣松の言う役割と我々の言う役割とは，その意味するところは同じではない。廣松の言う他者の暗黙の期待への応答としての行為を役割とすることは，我々の立場からするならば，意味への関与様式への期待であり，その次元ではまだ行為が関与する意味領域の配分が為されていない。廣松の言う様に，そうした他者の暗黙の期待への応答が物象化して「地位」や「部署」となるということは，人間存在の行為の別の側面であろう。廣松は，彼の言う役割的行動が「役柄」や「部署」「地位」に先行すると述べているが，彼の言うそうした役割がはたして「役柄」「部署」「地位」の成立の先行条件であろうか。他者の期待に応ずる行為を為すことは，行為の様式への期待に応ずることであり，それ自身が意味領域がシステムによって配分された行為に，あるいは存在運動へと繋がるであろうか。廣松の言う「部署」や「地位」は，明らかに関与する意味領域を配分された，制度化された役割であるが，彼の言う役割がそうしたものに先行する行為形態であるかどうかは疑問である。廣松の言う役割は対他的な在り方をする様に努力する人間存在の存在のことであり，そこから制度的な「部署」や「地位」が出てくるであろうか。制度的な「部署」や「地位」は，あるいはそうした制度に基づいて，それら

の制度内の「部署」や「地位」に着いた人間存在は，その「地位」や「部署」に相応しい振る舞いをするであろうが，それ自身はあくまでも対他的な在り方においての人間存在の諸々の有意味的存在者への関与の仕方であり，他者が満足する様な，その「部署」や「地位」に相応しい振る舞いの態度や，意味への関与の仕方を対他的に行うことである。しかし，対他的な存在構築で，役割の分節を説明出来るだろうか。役割とは，本来，或る役割が別の役割との相互主観的な存在運動において組み合わさることによって，その纏まりが或る完成された行動体系と成る，そのおのおのの存在運動を言う訳であり，従って，おのおのの役割が関わる意味領域は互いに異なるのでなければならない。しかるに，役割を廣松の如く，対他的な関係から導き出すのでは，この役割のシステム全体での分節を説明することが出来ないのではないだろうか。それ故に，役割を，それが関与する意味の多様から説明すべきではないだろうか。

システムにおける時間性について述べて来たのであるが，それに関する問題の最後として，システム内での差異化について若干触れなければならない。既に述べた様に，人間存在の時間性は，有意味的存在者の意味へと関わることによって，己れの存在を構築し，その意味からの己れの存在の離脱による己れの存在の瓦解の連続性であり，それは自己の存在の差異化であり，世界の中への差異の導入である。そうした存在の差異化がシステムではどのように成るであろうか。システムにおいては，既に述べた様に，それに内属する人間存在の時間性は一貫した存在運動として，関与する意味の系列化によって存在運動が関わる意味がシステムによって配列される。すなわち，人間存在が或る有意味的存在者の意味への自己の存在の適合による存在構築を離脱して，別の有意味的存在者の意味へと関与することによって別の存在を構築することによって自己の存在を差異化して，そのことによって世界の意味秩序に差異を齎らす，差異化の作用は，システムにおいては，他の人間存在の存在運動による差異化と連動して，差異化の運動自体が組み合わされて，或る目的へ向かって差異化の運動が完成される。例えば，工場で何人かの人々

が或る商品を完成させるために，その商品を制作するための諸々の有意味的存在者に関与しつつ，自己の存在を差異化し，工場というシステム内に差異を齎らす。そうした差異化の働きは，工場というシステムにおいては，商品の完成という目的へと最終的には収斂して行かなければならない。個々の部品の制作に関わる人々は，その部品の制作のために諸々の有意味的存在者に関与して，その商品を制作するという存在を構築しているのであるが，そのことによって自己の存在を差異化し，工場というシステム内に差異を導入するのであるが，そうした諸々の差異化の作用は最終的にはその商品の完成という目的へと収斂し，そのことによって差異化作用は終局をむかえるのである。世界における差異化の運動の場合も，自己の存在運動，あるいは差異化の作用は，目的を持っている場合があるが，他者の存在運動との連動によって，諸々の差異化の作用が組み合わされて，それが或る目的へと収斂するということは少ない。それがシステムにおける時間性と世界における時間性の違いである。

（3 －13）

時間性についてはおおよそ述べたので，それに基づいて歴史性について述べよう。ハイデッガーは歴史について次の様に述べている。

「現存在の歴史性についてのテーゼは，世界を欠く主観が歴史的であるという意味ではなくて，むしろ世界-内-存在として実存している存在者が歴史的である，と述べているのである。歴史の経歴（Geschehen der Geschichite）は，世界-内-存在の経歴である。現存在の歴史性は，本質上，世界の歴史性であり，世界は脱自的-地平的な時間性に基づいて，この時間性の時熟に属しているのである。現存在が事実的に実存している限り，現存在はいつもまた，世界の内部で発見されているものごとに接している。歴史的な世界-内-存在の実存とともに，道具的存在者や直前的存在者が，始めから世界の歴史の中へ引き入れられている。」[24]

24）Heidegger : *op. cit.*, S. 513.

ハイデッガーは世界-内-存在としての現存在が歴史的であり，いわゆる歴史というものが成立する根拠は現存在が世界-内-存在として存在しているからである，と述べている。我々の歴史についての考え方もこのハイデッガーの歴史観に基づいている。歴史学は過去を扱う学問であるが，過去が過去として成立するのは，人間存在が自らの過去を過去として保持しているからであり，従って，歴史学の成立はそうした人間存在の存在に基づくと言ってよい。既に述べた様に，人間存在は絶えず何らかの有意味的存在者の意味へと己れの存在を適合せしめることによって，己れの存在を世界の中で構築し，それを絶えず追い越して，過去へと押しやる。その様にして，過去へと押しやられたかっての人間存在の存在は，過去へと移行することによって，人間存在の，別の意味との存在構築を支えているのである。人間存在はそのように絶えず，自己の現在を乗り越えることによって，それを過去へと移行せしめ，過去は現在を支えることによって，人間存在の現在において存在しているのである。それ故に，自己の現在からしか世界を見ることが出来ないにも拘らず，あるいは自己の現在に対してのみ世界は己れを開示するにも拘らず，我々は世界が現在眼前に有る光景だけにとどまらず，無限と言ってよいほどの広がりを持っていることを知っているのは，我々の存在が意味と共に構築する現在の中に，過去が総合されているが故である。むしろ，我々の視野を超えて世界が拡がっていると，我々が知っていることから，過去が我々の現在の中に総合されていることの証左が得られるのである。それ故に，過去は過ぎ去って消滅したのではなくて，現在の中にそれを支えるために存在しているのである。そして，我々はそうしたことから，我々が日常的に関与している意味と共通の意味の連関が世界に広がり，現在我々の視野の中に無い人間存在がそうした意味へと関わり，そしてそれから離脱することによって，自己の存在に，あるいは世界の中に差異を生み出していることを知っている。つまり，世界がその全体において絶えず差異化されているということを我々は知っている。そうしたことから，我々の視野の中には世界全体の絶えざる差異化としての歴史性の展望が開かれるのである。すなわち，我々は

世界が無数の人間存在の存在運動によって，絶えず差異を生み出して，その意味集合態としての形態を少しずつ変えていることを知っているのである。すなわち，世界の構成要素としての意味の集合が，それを支えている人間存在の存在要求によって，変化して，新しい有意味的存在者が生み出されて，それとともにそうした新しい有意味的存在者の世界の中への出現によって，それに淘汰されて，人間存在の存在構築の契機としての意味を喪失して，世界の意味集合態の中から消えて行く意味が有り，その様にして，世界の中に意味の組み替えが起こり，世界がその形態を変えているのである。そうしたことを我々は自己の周囲の世界での意味の組み替えの生起によって知っている。そして，そうしたことに伴って，人間存在の存在運動の形態も変化して行く。例えば，それまではペンやボールペンによって文字を書くという存在構築を為していたのであるが，ワープロの出現によって，ペンやボールペンが淘汰されつつあり，人間存在が文字を書くという存在形態は，原稿用紙を前にして，ペンを手に持って一文字ずつ書くという形態から，ワープロという機械を前にして，キーボードを叩きながら文字を書くという形態へと変化して行く。従って，歴史とはまず第一に，世界の意味集合態の形態の変化と，それに伴う，人間存在の存在運動の形態の変化であると言うことが出来る。いわゆる歴史的な出来事は，そうしたことを基盤にして生ずるのである。

（3 −14)

我々は環境問題を時間的側面から取り扱う基盤をすべて得ることが出来た。今までの成果を踏まえて，環境問題の時間的考察へと進もう。

最近の新聞にオゾン層の破壊の記事が掲載された。まずその記事を引用しよう。

「南極上空のオゾンホールが南極大陸の1.5倍と，過去最大の大きさになっていることが，気象庁オゾン層情報センターの調査で11日，わかった。オゾン層破壊の原因となるフロンガスの規制が世界的規模で進められ，地上では排出量の増加が頭打ちになっているが，上空にまで効果が現れるには，なお

時間がかかるという。」[25]

周知の如く，オゾン層の破壊は，フロンガスが原因であるとされている。つまり，フロンガスを使用する冷蔵庫やクーラーの冷媒，発泡スチロールなどの発泡剤などの使用によってオゾン層の破壊が進んで来たとされている。

そうしたフロンガスの使用は，これまでの我々の存在論的表現を使うと，人間存在のフロンガスを用いた有意味的存在者への，己れの存在の適合による自己の存在の構築によって為されて来た。つまり，人間存在の存在運動の一種によって，オゾン層の破壊が進んだのである。それでは，どのようにして我々は我々の，世界の中での自己の存在構築によってオゾン層が破壊されたということを理解することが出来るのであろうか。それは今まで論じて来た，人間存在の時間性から説明することが出来る。すなわち，我々は意味集合態としての世界の中で，無数の人間存在が絶えずおのおのの存在構築によって，世界の中に差異を導入していることを知っている。

オゾン層の破壊は，そうした世界の絶えざる差異化の結果生じた，世界自体の差異化の一種である。つまり，人間存在が自己の存在を絶えず差異化することによる，世界自身の差異化によってオゾン層の破壊は進められた，と言って良い。すなわち，オゾン層が次第に薄くなり，その結果オゾンホールが出来る様になったことは，正に世界自体の差異化現象である。

また，二酸化炭素の大気への放出による大気の温暖化現象に関しても，同じことが言える。二酸化炭素の大気への大量放出の大部分は発電によるものであるが，自動車や暖房，湯沸器などによる二酸化炭素の放出も有る。こうしたことも，やはり我々が今まで述べて来た，人間存在の有意味的存在者の意味への己れの存在の適合による己れの存在構築，あるいは現在の構築，そしてそれからの離脱による自己の存在の差異化，そうしたことに基づく世界の差異化の一種である。

さらに熱帯雨林の伐採に関しても同じ事が言える。或るシステムによる熱帯雨林の伐採は，システム内で産出される独自の時間性によって，つまりそ

25）朝日新聞，1996年９月12日の記事。

こに帰属する人間存在に一連の存在運動の系列を贈与し，さらに他の存在運動との連動による差異化の作用の収斂によって熱帯雨林の伐採が為される。

そしてそうした人間存在の差異化と，それに基づく世界自体の差異化現象が，時計によって測定される数字化された時間へと変容することによって，そうした問題の時間性がより鮮明になる。つまり，数字化された時間は，そうした差異化の作用の限界を数字として我々に示してくれるのである。すなわち，二酸化炭素の大気への放出による地球の温暖化の限界はあと何年後であると言う風に，あるいはフロンガスの大気への放出による限界は後何年であるとか言った風に，時間的な問題としてより明らかにする。つまり，本来人間の時間的作用によって生じた問題を，数字としての時間へと変形することによって，そうした環境問題の時間性が時間的問題としてより鮮明になる。

そしてそうしたそれぞれの問題を時間的な問題として捉えて，それらを数字化することによって，それらの数字は或る独自な意味を有する様になる。それは過去の人間存在による差異化の運動と未来における人間存在の差異化運動の結果を示している。例えば，今のままにフロンガスを放出するという人間存在の差異化の作用が続けば，2050年ごろには20～30%の紫外線が増加するという予測があるとする。[26]あるいは，このまま温暖化が進めば40年後には9～29cmの海面上昇が生ずる，という予測があるとする。[27]そうした数字は人間存在の過去の差異化作用の蓄積によって支えられており，またそのことに基づいての未来についての予測である。既に述べた様に，人間存在の未来は，現在からの未来への展望であり，人間存在による現在の，あるいは自己の存在の乗り越えによって，自己の存在へと到来する，自己にとってまだ現在ではない，あるいはまだ自己の存在になっていない，可能的状況である。そして，それは人間存在が組み込まれている世界の意味連関の中への差異の導入によって，自己の存在へと到来しうる。さっきの環境についての予測の場合も同じことが言える訳であり，無数の人間存在による存在運動によ

---

26)『地球温暖化の影響予測』中央法規出版，平成4年。
27) 同書。

って世界の中への差異の導入，つまり大気へのフロンガスの放出，あるいは二酸化炭素の放出による世界の意味連関の差異化の結果生じるであろう事態の予測である。その予測は自然科学的な方法に基づいてなされる訳であるが，そうした予測は人間存在による世界の差異化が前提になっているのである。あるいは，そうした世界の差異化を数字化した物に基づいて為される予測である。そして，その数字は，人間存在が世界の中で存在することを危うくする一つの限界を示しているという意味を持っている。つまり，人間存在による自己の存在の差異化と世界の差異化を自然科学的方法に基づいて数字化した物を，未来の自然界の状態へと投影することによって，人間存在による自己の存在の差異化や世界の差異化がいかにして自然へと影響を及ぼすかを予測したものであり，そうした人間存在の存在運動の限界性を示す意味を持っている。

そしてそれは世界の歴史性を孕んでいる。歴史性については既に述べた様に，人間存在による世界の差異化に基づく世界を構成する意味連関の組み替えであり，その結果の上に我々は存在の場を得ているのである。そうした世界の歴史性に基づいて，環境問題が問題となる。すなわち，環境問題はそれが問題となるのは，人間存在にとっての環境の未来であり，環境の過去ではない。しかし，環境問題が一つの問題として成立するのは，人間存在の過去から現在に到る存在運動，言い換えれば，人間存在による環境破壊に到る行為の蓄積を踏まえている訳であるから，世界における意味連関の組み替えを為して来た人間存在の過去の存在運動によってである。その意味において，環境問題は世界の歴史を踏まえている訳である。

最後に，何故大気とかオゾン層といった，我々が存在している場とは，直接的に関係ない場での自然現象が，環境問題といった形で問題になるのか，ということについて述べよう。既に述べた様に，[28] 環境が問題となる場合には，意味的に無化されていた空間が，人間存在の存続を脅かす状態となった場合に，その空間がそうした人間存在の存続を脅かす空間という意味として

28）拙著「環境のオントロギー Ⅱ」参照。

意味化される場合である。それでは，そのように今までは人間存在の存在にとって意味を持たなかった空間が，我々の存続を脅かす空間として我々にとって脅威となるのであろうか。すなわち，我々が存在しているこの大地から何万キロも上空の大気や，人跡未踏のジャングルなどが，我々の存在に対してその様な意味でもって我々にとって脅威となるのは何故なのだろうか。

勿論，我々は常識として，そうした空間が人間の存続を脅かすということを色々な情報によって知識として知っている。しかし，我々はどうして日常的には，我々が存在していることと関わりの無い空間が我々にとって脅威となると思うのであろうか。既に述べた様に，我々に対して開示される世界は，常に我々の存在からであり，あるいは我々の現在からであり，上空何万メートルの大気が我々の存在の場となることは無い。飛行機に乗っている時に，我々は客観的にはそうした大気の中に居る訳であるが，しかし我々は自分は適度に温度が調節された飛行機の機内に居るという意識しかないだろう。そこで開示される世界は飛行機の機内であり，あるいは窓の外の光景である。窓の外には上空何万メートルの大気が拡がっている訳だが，しかし我々はそこに存在しないし，我々のその場合の環境は地上の延長としての飛行機の機内である。だから，そうした空の彼方に拡がっている空間は，日常的には，我々に関係無い空間である。

我々は自分の存在運動が，あるいは自分以外の人間存在の存在運動が，そうした大気に影響を及ぼしている，ということを知っている。既に述べた様に，意味の無限な広がりによって世界全体が人間存在の存在運動によって絶えず差異化されている，ということを我々は知っている。そうした無数の人間存在による世界の差異化が，日常的には関わりを持たない空間を差異化している，ということを我々は知っている。すなわち我々は，我々の日常的な存在運動によって上空何万メートルの大気が汚染されている，ということから，そうした日常的には関わりの無い空間が我々の存在に脅威を与えている，という認識を得るのである。すなわち，我々の存在運動という時間性によって，我々の空間は上空何万メートルにまで拡がるのである。